

## 要旨

---

論文題目                      シャーロット・パーキンズ・ギルマンと「社会的母性」

---

氏名                              山内 惠

---

本論の目的は、『女性と経済』(1898)の著者として、アメリカ合衆国の世紀転換期に活躍したラディカル・フェミニストと評価される社会思想家、シャーロット・パーキンズ・ギルマン(1860-1935)のフェミニズム思想を分析することである。

「近代」の啓蒙主義の時代に生まれたフェミニズムの思想は、「近代」の市民革命が人間の「自由、平等」の理念を謳いながら、女性を排除してきたことへの異議申し立てのイデオロギーとして誕生したものであった。そのフェミニズムの語源が、ラテン語の「女性の思想」(femina + ism)という言葉であることから明らかなように、フェミニズム思想とは、男性と「平等」の権利を要求しつつ、同時にまた女性の性差の特性「差異」をも認めさせようとするパラドキシカルなイデオロギーであった。「近代」のフェミニズムの歴史は、根底に「平等」と「差異」という矛盾する理念をはらみつつ、「差異」と「平等」を振り子のように揺れながら、様々なフェミニズムの運動を展開してきたものであった。

ギルマンは、19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した思想家で、彼女自身が自分を「過渡期の女性」と表現したように、ヴィクトリア朝的「真の女らしさの信仰」を人々が信奉する時代と、新しい時代の女性を象徴する「ニュー・ウーマン」が登場する世紀転換期、この2つの時代を重ねるように生きたフェミニストであった。

このような時代に生まれたフェミニストの宿命であろう。ギルマンのフェミニズム思想

の特徴は、彼女自身が伝統的な「女らしさ」（ギルマンの場合は「母性」）にこだわりつつ、「ニュー・ウーマン」として男性に依存することなく「自立」した女性であるべきだとする主張であった。そのことは、人として「平等」であることと、女性としての「差異」をも同時に要求するというジレンマを、ギルマンに抱かせることになった。彼女は生涯このジレンマと葛藤することを強いられたが、このジレンマとは、実は「近代」に誕生したフェミニズム思想そのものが「平等」と「差異」を内包するというパラドックスにあったからだ。ギルマンはこの二重のジレンマと戦いながら、独創的なフェミニズム思想を紡ぎ出すことになるのである。本論が目的とするのは、女性の自立と「母性」の調和の理論化をライフ・ワークとしたギルマンのライフ・ストーリーを語りつつ、二重のジレンマと葛藤する「私のギルマン」の物語を構築することである。本論の内容は以下である。

第1章では、ギルマンが狂気の体験を通し「黄色い壁紙」(1892)を書くことで、世紀転換期の知的リーダーへと成長するまでの前半生を描いた。ギルマンは、ニュー・イングランドの名門ピーチャー家の末裔として生まれた。父親のフレデリックは、シャーロットが生まれた直後に、妻と2人の子供を残して家庭を放棄し、一家は親戚の家を転々と渡り歩く放浪生活を余儀なくされた。ギルマンは、デザイン学校を卒業して自立のためにカードデザインの仕事をするなどした後、絵描きのステットソンと出会い、恋におち24歳で結婚。翌年には娘のキャサリンを出産するが、精神の異常をきたして、精神科医の名医であるミッチェル博士のもとで「安静治療」を受けることとなった。しかし当時の治療は対症的治療であったことから、ギルマンのような患者には、逆に症状の悪化を招くこととなった。

こうした自らの体験を綴った短篇小説（ギルマン本人は小説ではなく、治療の過ちを告発する書であると後に雑誌に発表）「黄色い壁紙」は、家父長という束縛の中で自由を求めて狂気におちいるヒロインを描き、評判となった。ギルマンにとって「書く」という行為は、自由を求める気持ちと伝統的価値観との間で葛藤する自己を表現する重要な手がかりとなり、以後、ギルマンはラディカルなフェミニストの思想家としての自らの行くべき道を定めていくことになるのである。

第2章では、ギルマンの主著である『女性と経済』（1898）の分析と、その主張が改革の時代の思想的潮流から影響を受けて形成された過程をたどる。夫と別れた後、ギルマンは改革の気運にあふれたカリフォルニアに赴くことになり、彼女のフェミニズム思想の核となる思想、「ナショナリズム」（社会主義の一形態）や社会学者のレスタ・F・ウォードの社会改革的進化論、ヘレン・キャンベルの家事労働論と出会い、独自の思想を熟成し

ていくことになる。

1898年に発表した『女性と経済』は、女性の経済的自立と家事労働と育児の社会化を説き、日本を含む世界7カ国で翻訳されて評判となった女性解放の書である。「人間の女性は食べ物も住居も男性に依存している」と告発するこの書は、女性の過剰な女らしさを乳牛に例えるなどして、進化論を駆使して女性の劣性が歴史的に構築されたものであることを解明した書であった。19世紀の女性たちが信奉してきたヴィクトリア的価値観が、女性を「女の領域」に押しとどめ、性役割分業を正当化するイデオロギーにすぎないことをギルマンはこの書で示したのだ。ギルマンは、当時の第1波フェミニズム運動に関わっていた多くのフェミニストが、「女の領域」での「<sup>ドメスティシティ</sup>家庭性」を武器に女性運動を展開していたのに対して、この「<sup>ドメスティシティ</sup>家庭性」こそが、女性を貶めるものであることを喝破したのである。

したがってギルマンの「母性の社会化」の主張は、「<sup>ドメスティシティ</sup>家庭性」の美德—「共和国の母」の伝統の基づく、最も重要な「母」としての役割—を否定することを意味し、伝統的女性観と真っ向から対立し、ギルマンは、同時代の多く女性から非難をあびることとなった。

第3章は、ギルマンの母性論をめぐるアメリカと日本の論争を紹介する。ギルマンの『女性と経済』での主張、「母性」を社会化することの是非について、スウェーデンの思想家エレン・ケイは、女性にとって真の恋愛によってもたらされる「母性」こそが重要であって、その崇高な任務を人任せにしようとするギルマンの主張を、「母性のかけらもない」フェミニストの主張であるとし、厳しくギルマンを非難したのだ。これに対しギルマンは、自分は母性を否定するわけではなく、「女の領域」に留まる母性は個人的愛情で子供を束縛するもので、「女の領域」から解放された「社会」という領域にある母と子供こそが、新しい時代にふさわしいものであるとケイに反駁したのである。

アメリカでのフェミニスト論争が、「女の領域」をめぐる母性の論争であったのに対して、大正期の日本は、近代の家族制度が形成される黎明期にあったことから、日本の論争は、「女の領域」をめぐる母性論争というよりも、国家による母性保護を是とするか否とするかの論争となった。日本における「母性保護論争」は、母性をめぐり、あくまで女性は国家にも依存することなく自立すべきであって、男性と「平等」に生きるべきとしたのが与謝野晶子で、女性が人として生きるために、国家への母性の保護要求は認められるべきで、その要求は依頼主義にあらざると反論したのが平塚らいてうであった。両者の主張を止揚したのが、社会主義者の山川菊栄であった。山川は、両者を「平等」派と「差異」派

に分類したうえで、女性が母として働くための問題解決は、社会的、経済的な根本的改革を社会主義により実現させる以外に方策はないと主張したのであった。

論争でのギルマンの母性論の主張は、平塚や山田わかといった母性保護を擁護する2人の論者により引かれ非難をあびることとなり、真に理解されるにはいたらなかった。大正期の人々にとって、家事労働に専念できるのはごく恵まれた一部の階級に限られ、「夫に経済的に依存する妻」という近代家族の性役割のあり方そのものを批判するギルマンの主張を、日本の論者たちは受容することができなかったのだ。

第4章では、ギルマンのライフ・ワークとなったリトル・マガジンである『フォアランナー』(1909-1916)において執筆された3つのユートピア小説の分析をとおり、ギルマンの男性社会批判の主張がどのようなものであったかを論じた。3つのユートピア小説は、『山を動かす』(1911)、『ハーランド』(1915)、『彼女と共に我らの世界で』(『我らの世界』と略記)(1916)であるが、『山を動かす』は、彼女が思想的影響を受けたベラミーの『顧みれば』(1888)をほとんどを真似たギルマン版であった。『ハーランド』と『我らの世界』は、連続するフェミニストのユートピアの物語であり、ギルマンのフェミニズムの展望を描いた作品となった。

『ハーランド』の舞台は、南米のジャングルで、その国は2000年の間女ばかりの赤ん坊が生まれ続けるという女のユートピアである。その国にアメリカの3人の若者が進入して捕らえられるが、3人は「ハーランド」の国の母性を基本とする理念や歴史を学ぶうち、次第に「女性」を男性と「平等」の「人」として受け入れ、意識を変革していく。物語の最後で、3人の若者と「ハーランド」の3人の娘たちが恋におちて、3組のカップルが誕生する。『我らの世界』は『ハーランド』の続編である。3組のカップルのうちの1組が現実の世界を体験することになる。外界、すなわち現実の世界(我らの世界)は、「ハーランド」の人々が行き来するに値する世界かどうか、その判断がこのカップルに託される。ところが、外の現実の世界(我らの世界)は、第1次大戦が勃発した凄惨な世界であった。2人は、男性中心主義社会の悲惨な状況に直面し、外の世界は、生まれてくる子供を育てるにはふさわしくないと結論を下し、ユートピアの世界にもどっていくところで物語は終わる。ギルマンのフェミニストとしての評価は、『女性と経済』がピークで、それ以後の作品に関しては、『フォアランナー』も含めてほとんど注目を集めることもなく、ギルマンと共に忘れ去られた。彼女のフェミニズム思想が死後再び評価されるのは、第2波フェミニズムが興る半世紀後である。

本論が目的としたのは、ギルマンのフェミニズム思想を古びた「過去」のものとして分析したのではなく、矛盾に満ちたギルマンの人生とそのフェミニズム思想に、「近代」に生まれたフェミニズムの、「平等」と「差異」を内包するそのパラドックスのダイナミズムを見ることであつた。今日のフェミニズムが、性差以外の多様な「差異」を取り込みながら、未来に開く多様な思想へと変容していく可能性を持つものであるならば、二重のジレンマに苦しんだギルマンの思想から、私たちはフェミニズムのダイナミズムの源を学ぶことができることを、本論の結論としたい。